



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	民族自身による言語の記録と研究
Author(s)	津曲, 敏郎
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」. 平成21年2月22日. 札幌市.
Citation	知里真志保 人と学問 : 生誕百周年記念シンポジウム予稿集, 1-8
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38284
Type	conference paper
File Information	1_1-8.pdf



民族自身による 言語の記録と研究

津曲 敏郎

北海道大学大学院文学研究科

生誕百周年記念シンポジウム

知里真志保：人と学問

2009年2月22日 北海道大学

2

要 旨

少数民族言語は今、世界的な規模で急速に失われつつある。親から子への自然な継承がむずかしくなった現在、民族自身が主体的に言語を記録し、次の世代へ受け渡すことの意味が重要性と緊急性を増している。

アイヌ語の継承にとって、知里姉弟はその先駆者であったといえる。真志保生誕百年を機に、民族とその言語のかかわりについて、他言語の事例を紹介しながら、これからの少数民族言語の百年を展望する。

3

話の流れ

- 1. 少数民族言語の今
- 2. 「保持」への道
- 3. 民族自身による記録の重要性
- 4. 少数民族言語のこれから

4

民族と言語

民族とは？

特定の個別文化(言語、信仰、習俗、心理的特徴、領域など)およびそれへの帰属意識を共有する、人類の下位集団 (『文化人類学事典』弘文堂 1987)

民族と言語の関係

■ 言語は帰属意識(アイデンティティ)の重要で客観的な指標 (しばしば、言語分類≒民族分類)

→ その指標の位置づけが今、変わりつつある

5

世界の言語の数

- 6000～7000の数字があげられている。
- 概数しか言えない理由
 - (1) 「言語」と「方言」を区別する明確な基準があるわけではない。
 - (2) 調査の十分に及ばない言語、特に 危機言語 (Endangered languages)の状況が不明。

6

「少数民族言語」の数

- 6000言語のうち、約半数は話者数が1万人以下の少数民族言語
 - ⇒ そのほとんどが
 - ① 大言語とのバイリンガル
 - ② 子どもに継承されていない
 - ③ 書きことばとして機能していない

7

話者数100万人以上の言語の数

- 250言語
- 世界言語6000のうち、約4%の言語が100万人以上の話者によって話されている。
- この、わずか4%の言語のどれかを、世界人口の96%の人が話している。
4%の言語⇔96%の人口
96%の言語⇔4%の人口

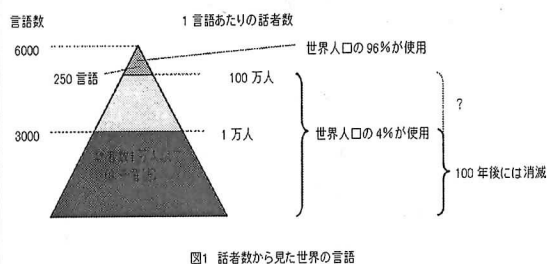
8

100年後の言語の数

- 約半数(3000)の言語が、今後100年以内に消滅。
- 最悪の場合、10%~5%(600~300)の言語しか残らない、と予測されている。

9

話者数から見た世界の言語



10

なぜ、「言語の危機」は野生動物の危機より、一般の関心が低いのか？

言語学者でさえ無関心な人もいる



11

「言語の危機」が関心を引かない理由

- 野生動物の絶滅と違って、言語の消滅は必ずしも話者集団(民族)の絶滅を意味しない。言語を「取り替える」だけ。
- 近代化とグローバル化の中で、少数言語は淘汰されるべき、あるいは淘汰されてもやむをえない、と考える人が(当事者にも)多い。
- 世界中の人々が少ない言語で意思疎通できるのは、むしろ「のぞましい」ことではないか、と考える人もいる。
- 大多数の人にとっては「他人事」。

12

なぜ、今「危機」なのか？

近代化とグローバル化

- 国家支配に組み込まれ、大言語の支配下に入る
- 環境破壊と伝統の衰退
⇒固有言語の基盤の弱体化
- TV等、大言語メディアの普及
- 「寄宿制度」を含む学校教育
- 民族間の婚姻 etc.

13

なぜ「保持」すべきなのか？

- 人類の知的文化遺産として
多様性が文化を豊かにする
- 人間の言語の全体像を理解するために
辞書も文法も書かれずに、多くの言語が失われている(どの言語も等しい価値をもつ:「未開言語」などない)
- 民族のアイデンティティとして
言語は「伝達の道具」以上のものである

14

言語の「復興」と「保持」

1. 復興: 継承の途切れた言語が、当該集団の主要言語として、以前と同じように使われ、子どもにも継承されるようになる
→事実上ほぼ不可能
2. 保持: 当該集団の多くの成員(子どもを含む)がその言語に対する価値を認め、さまざまな程度の関心・知識・運用力を継続的にもつようになる
→実現可能・持続可能

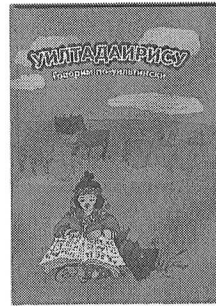
15

民族言語保持に向けての試み

- 事例1: ウイルタ語(ツングース諸語、サハリン)
民族人口約350人、話者数20人以下
2008年、初の文字教本刊行
- 事例2: ウデヘ語(ツングース諸語、ロシア沿海州)
民族人口約2000人、話者数100人以下
1930年代に文字を与えられるが定着せず
近年あらたな文字教本等が出る

16

ウイルタ語の文字教本 (2008年刊)

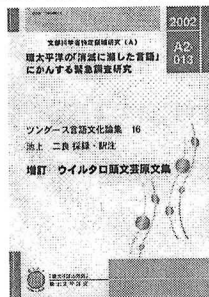


刊行への道

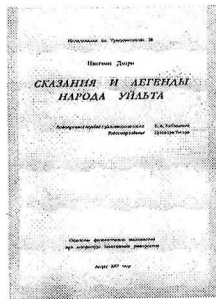
- ・研究者の寄与: 池上二良・北海道大学名誉教授
- ・現地ウイルタの人々の熱意と参画
- ・政府の認可、学界の支援
- ・地元企業の資金提供

17

研究成果を教材化する



池上 採録・訳注 2002『ウイルタ口頭文芸原文集』(音声CD付き)



同左をもとにしたロシア語版(津曲編、ビビコワ訳 2007)

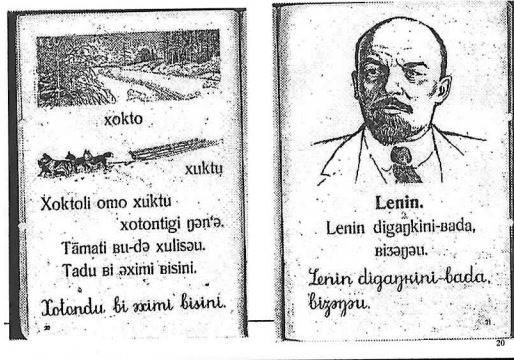
18

ソ連/ロシア北方言語の文字政策と実情

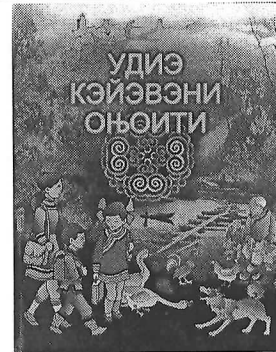
- 1930年代、はじめローマ字で、のちにロシア字によって、正書法が与えられ、学校教育で用いられる。
- ツングース諸語の場合: エウエンキー語、エウエン語、ナーナイ語、ウデヘ語が文字化される。
⇒ウデヘ語では定着しなかったが、他の3言語については今日まで続いている。出版・新聞も。
- 実用より、民族意識のシンボルとしての役割
- 為政者のポーズ、アリバイ? 的側面も。

19

ローマ字によるウデヘ語教科書 1932



ウデヘ語の新しい教科書

Kjalundzuga 1999
ハバロフスク刊ロシア文字にハ, Ъ
などの文字を追加

民族語文字化の功罪と限界

- 民族語教育には有用(必須)。
- 民族のアイデンティティ確認、言語や伝統文化への誇りを維持するうえで一定の役割。「文学」の創出。
- どの方言に基づくか→標準化の推進／方言的多様性の切捨て、日常の話しことばとのズレ。
- ロシア語読み書きの習得優先、ロシア語による教育→日常・生活言語としてのロシア語。
- 「与えられた文字」に対する違和感・不信任感。

話者自身による文字化

- 話者自身の内面の記録、自己との会話の手段
- 将来の世代への遺産

■ 事 例

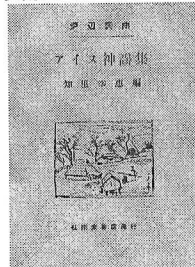
- (1) アイヌ語: 知里幸恵(神謡集)、金成マツ(ユウカラ)、砂沢クラ(自伝)
- (2) ウイルタ語: 北川源太郎(語彙と短文)
- (3) ウデヘ語: A.カンチュガ(自伝)

知里幸恵『アイヌ神謡集』 1923

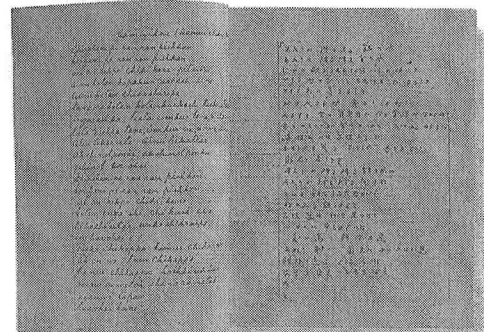
知里幸恵 1903-22



弘南堂1970年復刊の表紙



知里幸恵ノート



ウデヘ語絵本とCD版



ウデヘ語原文／和露英訳付き(2004年)

画像・テキスト・音声付きCD₃₂

話し手なき書きことば

- 最後の話者の世代が書き残したもの
 - 後の世代の潜在的読者・学習者のために
 - 民族の財産、知識として記憶にとどめられる
 - ⇒「生き残り」の道
- 民族の「古典語」として
 - ラテン語、満州語の場合：話しことばとしてはほぼ消滅したが、書きことばとして残り、今も学ばれる。
- 話しことば「復興」へ：ヘブライ語の事例

33

ヘブライ語復興の条件

- 『旧約聖書』の言語：ユダヤ人の世界離散後(紀元2世紀末)、母語として話されることはなかったが、宗教的基盤をもつ書きことばとして維持される
- 強力な推進者(ベン・イエフダ 1858-1922)による再生運動(母語話者の創出、ヘブライ語委員会の結成、新語の形成)
- イスラエル建国(1948)にあたり、国語として認定される(←共通語の不在)
 - ➡ 1982年現在で話者240万人

34

民族(話者)自身が書くことの意味

- 「民族の心」が直接、伝えられる
 - 民族の誇りと自信、当事者意識を高める
 - 音声からのテキスト作成は膨大な時間と熟練、話者の協力を要する←「時間との戦い」
- * 話者ならだれでも「書ける」わけではない
 ⇒ 埋もれた「書き手」の発掘・育成・支援
 (言語学者によるテキスト採集・表記とならんで)

35

話者が書いたものが活用されるために

- 対訳形式であること
- 音声を併せ残す(表記の不備を補う)
- 映像、マルチメディア化
 - 魅力ある教材へ
- コミュニティ主導、内外での理解と支援
- 整理・刊行・利用での第三者の協力(言語学者、支援組織)

36

民族出身の研究者の役割

- 「話者」「当事者」としての背景に基づく言語的直感、内からの視点
 - 民族の指導者として、誇りと自信の拠り所として
- ➡ 多様な言語、多様な文化が「あたりまえ」に共存する社会をめざして

37

参考文献

- 知里真志保 1985 [1956]『アイヌ語入門：とくに地名研究者のために』北海道出版企画センター, 札幌.
- 知里幸恵 1970 [1923]『アイヌ神謡集』札幌：弘南堂書店.
- 池上二良（編）1986『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(1)』（ウイльта民俗文化財緊急調査報告書 8）札幌：北海道教育委員会／網走：網走市北方民俗文化保存協会.
- 池上二良・津曲敏郎（訳解）1988, 1990, 1991『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(2), (3), (4)』（ウイльта民俗文化財緊急調査報告書 9, 11, 12）札幌：北海道教育委員会／網走：網走市北方民俗文化保存協会.
- 池上二良（採録・訳注）2002『増訂ウイльта口頭文芸原文集』（ELPR A2-013, ツングース言語文化論集 16, CD1 枚付き）吹田：大阪学院大学情報学部.
- Ikegami, J. 2007 *Skazaniya i legendy naroda ujilta*. Translated by E. A. Bibikova and edited by T. Tsumagari. Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon & I. Ja. Fedjaeva 2008 *Uiltadairisu: govorim po-ujl'tinski*. Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- カンチュガ, A.／津曲敏郎（訳）2001『ビキン川のほとりで：沿海州ウデへ人の少年時代』札幌：北海道大学図書刊行会.
- _____/_____.（編訳）2002『ウデへ語自伝テキスト』（ELPR A2-019, ツングース言語文化論集 17, CD1 枚付き）吹田：大阪学院大学情報学部.
- _____/_____.（編訳）2004『ウデへの二つの昔話』札幌：かりん舎（別途 CD 版あり）／札幌：北海道大学大学院文学研究科（ツングース言語文化論集 26）.
- Kanchuga, A. A./T. Tsumagari (ed.) 2003, 2005, 2006a, 2006b, 2007 *Bagdise xokto telunguni 1-5* [Avtobiograficheskaja povest': 1 Detstvo, 2 Junost', 3 Studencheskie gody, 4 Faja, 5 Oxotnich'i rassказы]（ツングース言語文化論集 22, 28, 29, 33, 34）札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 金成マツ（筆録）／金田一京助（訳注）1993 [1959-66]『アイヌ叙事詩ユーカラ集』1-7 巻. 東京：三省堂.
- Kjalundzjuga, V. T. 1999 *Udie kejeveni on'oiti*. Xabarovsk: Xabarovskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- クラウス, M. E.／笹間史子（訳）1994「言語の危機」北方言語研究者協議会（編）『アイヌ語の集い：知里真志保を継ぐ』:249-263. 札幌：北海道出版企画センター.
- 宮岡伯人 2002「消滅の危機に瀕した言語一崩れゆく言語と文化のエコシステム」宮岡伯人・崎山理（編）『消滅の危機に瀕した世界の言語：ことばと文化の多様性を守るために』:8-53. 東京：明石書店.
- 中川 裕 1996「少数民族と言語の保持」宮岡伯人（編）『言語人類学を学ぶ人のために』:263-280. 東京：世界思想社.
- _____. 1997『アイヌの物語世界』（特に第 5 章「アイヌ文学の歴史と現在」）東京：平凡社.

- 砂沢クラ 1983『私の一代の思い出：クスクップオルシベ』札幌：みやま書房。
- 津曲敏郎 2001「ウデへの自分史との出会い」『アーキティック・サークル：北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌』41:12-14. 網走：北方文化振興協会。
- _____ 2002「言語の危機と21世紀言語学の課題」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』8 (ELPR A2-012): 131-141. 吹田：大阪学院大学情報学部。
- _____ 2003「書きことばの創生：少数民族が文字をもつとき」『国文学』48/12 (2003年10月号): 10-14. 東京：学燈社。
- _____ 2006「話者による危機言語の記録とその活用：ウデへ語絵本作りをとおして」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』:134-143. 札幌：北海道大学出版会。
- _____ 2007「無文字言語のゆくえ：北方少数民族言語はどう生き残れるか？」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』14:159-166. 札幌：北海道大学大学院文学研究科。
- 山本 昭 2000「危機に瀕した言語の研究：何を為すべきか」『危機に瀕した言語について講演集(1)』（ELPR C-001）:3-31. 吹田：大阪学院大学情報学部。